

日本語における主題展開のモデルと「主題・焦点の分節」¹

—チェコ語との対照—

カレル フィアラ

はじめに

戦後のプラーク学派の考え方によると、文（発話）の深層の語順は、伝達される情報の重要度（いわゆる「伝達動力」Communicative Dynamism）に従う。本学派では、この現象を「主題・焦点の分節」(Topic-Focus Articulation, TFA)と呼ぶ。TFAの理論によると、自然言語の語順は普遍的な情報構造と特定の統語プロトタイプの競合によって規定される。

チェコ語と英語の語順に関する対照研究は、戦前には特に Mathesius(1929、1933、1939、1961)（日本語訳 1981）によって進められ、「文の実際的分節の研究」として知られる。英語では Functional Sentence Perspective=FSP、ドイツ語では Thema-Rhema Gliederung=TRG などの概念が用いられる。最近、Hajičová らも英語でも Topic-Focus Articulation= TFA という術語を用いる。

Mathesius(1939)の英語語順の研究は、イギリスでは Halliday ら (1976)、アメリカでは Kuno(1972)などに影響を与えた。また、Chomsky 学派では、focus（「焦点」）という術語が一般的である。チェコでは現在 Daneš、Firbas、Sgall ら、P.Novák、Hajičová、Koktová などがこの研究を継承している。Mathesius によると、チェコ語では、「文の現実的分節」は簡単に語順によって表されるが、英語では、語順を変えるために「受動変換」などを利用する。そのために、主題を主語に転換して、文頭に近づける方法、焦点をイントネーションによって強調する方法などがある。典型的な分析に関しても様々なモデルがあるが、「主題」「焦点」の他に「移行部」（チェコ語では přechod）・存在文の「出発点」（východiště existenciální věty）・「背景部」（kulisa）などを区別する。

最近、Mathesius が観察した語順傾向が普遍的現象であるかどうかということを確認するために、複数の言語についての対照研究が行われた（例えば Downing 他 1995、Kiss1995）。言語の普遍性という観点に立つと、かなり自由な語順を持つチェコ語についてのデータが役に立つと思われる。日本語とチェコ語の両言語においても、統語構

¹本論の主要論点は 1998 年 11 月 2 日、「プラーク言語学サークル」(Prague Linguistic Circle) 総会の講演で発表された。

造と情報構造は平行して展開し、これらの構造に基づく語順への傾向は競合している。チェコ語では、この現象は語順によって、一方、日本語の場合、この現象は、語順とイントネーションの他に、係助詞「は」と格助詞「が」の対立などによって示される。

本論では、発話における、重要度の異なる成分の仕組みを情報構造と見る。また、主節を基礎の機能体とするので、主節の情報構造を「基層の情報構造」と呼ぶことにする。「基層」以外の情報構造を持つ発話に関しては、重層的に重なる「重層の情報構造」(例えば修飾節・段落などの情報構造)と、それぞれの階層の焦点が異なる「重複の情報構造」を区別したい。

A. 言語一般の問題

I. 言語素材の機能的構成

背景

言語素材は言語機能に基づいて複数の階層に分けられるが、すべての成分がすべての階層において出現しているとはかぎらない。焦点だけがすべての階層に共通する成分であるが、その他の成分は、特殊な階層においてのみ出現する。

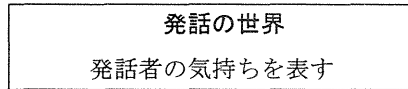
情報価値 高低の 順位	情報構造成分の名称		
1	焦点		
	焦点の解釈を限定する成分		
2	省略不可能な主題		
3	省略可能な主題		
	焦点・主題以外の成分	焦点に付く表現	機能体全体に付く表現
4	省略可能な付随情報の ある成分	限定部 specification	誘導部 setting
5	省略不可能な付随情報の ある成分	移行部 transition	有標のモダリティ marked modality
6	文文化した付随情報の ある成分	—	テンス・ムード tense, mood

言語素材の機能による主題部・焦点部などの区分

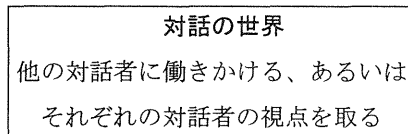
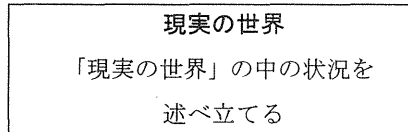
言語素材はその言語機能によって、それぞれ異なる「世界」に所属する情報を対象と

する。

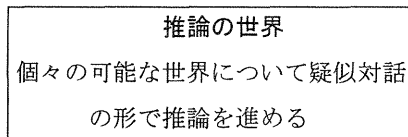
1) 焦点のみが表されるレベル



2) 主題と焦点が共存するレベル



3) 主題・焦点・「演算子」が共存するレベル



焦点化

Chafe(1987)によると、表現分割の規則(言語的表現を成分・節・文などに分割する規則)は、意識展開の特徴、すなわち「集中—集中緩和」あるいは「推進—停滞」のサイクルに基づいている。「発話者の交換」も、この「停滞の段階」(すなわち、発話・発言の切れ目)において行われることが普通である。発話が最小の発言(「ターン」)であるという考え方も、正にこの事実を反映しているといえる。

主題化

焦点化は、Erteschik-Shir(1996)が考えているように、すべての動物に共通する生理的な現象である。一方、焦点化の内容を主題別に分類することは、人間にしかできない作業で、発話以外の世界に限られる。発話者は、言外の世界の事態を述べ立てる際に、言外の世界の特殊な構成成分を主題としない「無題文」と、言外の世界のある部分を主題とする「有題文」を区別する。文の中では、「本主題」という部分は常に主節の名詞句によって表される。発話内においては、情報価値が最も高い成分は「焦点」であるが、文

連鎖に対しては、逆に「主題」のほうの持続性が高い。さらに、対話の世界では主題の他に、聞き手モダリティの誘導副詞・間投助詞・終助詞・名詞の呼格と、いわゆる tag questions が用いられる。

背景副詞

背景副詞は、時間・場所・状況などの場面設定 (setting、チェコ語では kulisa) を表す表現で、常に名詞句でない形で現れる。これらの表現は、特殊な文脈を除いて、非依存のものであるが、イントネーション・センターを含むことのできる通常の副詞成分とは異なって、発話の焦点には含まれていない。また、これらの副詞は真の「本主題」にはなりえないが、広義の「文主題部」の中に含まれている。

主題化のモデル—表現形式に基づく主題の予測

ア) Centering Theory

最近、主題化のモデルとして、Grosz 他 (1995) の Centering Theory が注目される。Centering Theory は、意識の焦点、指示表現の選択、文接続における有縁性などの相関を明らかにする試みである。一定の談話を構成するすべての発話 U_{n+1} に前向きセンター C_f の集合 $C_f(U_n)$ が付与され、また冒頭発話以外のすべての発話に、ただ一つの後向きのセンター $C_b(U_n)$ が付与される。 C_f の「中心」選択の優先順位は、「d 主語」 > 「目的語」 > 「その他」で、このランキングにおいては、代名詞化は前者から後者に向かって進んでいる。

規則 1: $C_f(U_n)$ が U_{n+1} において、代名詞として実現された場合、 $C_b(U_{n+1})$ も代名詞として実現される。以下の例で示すように、 C_b と U_n と C_f と U_{n+1} の関係を次の種類に分類することができる。

- 1) センターの持続: $C_b(U_{n+1})=C_b(U_n)$ 。この場合、 $C_b(U_{n+1})$ は、 $C_b(U_{n+2})$ のための最適の候補でもある。
- 2) センターの保存: $C_b(U_{n+1})=C_b(U_n)$ であるが、 $C_b(U_{n+1})$ は $C_b(U_{n+2})$ のために最適の候補ではなく、そのランキングは他の候補に劣っている。
- 3) センターの変更: $C_b(U_{n+1}) \text{ NEQ } C_b(U_n)$ 。

例:

- (a) John has been having a lot of troubles arranging his vacation.

$C_f = \text{John} \downarrow \text{trouble} \downarrow \text{vacation}$

- (b) He (John) cannot find anyone to take over his responsibilities.

$$C_b = \text{John}, C_f = \text{John}; \text{responsibilities}; \text{Cont}(U_a, U_b)$$

(c) He (John) called up Mike yesterday to work out a theme.

$$C_b = \text{John}, C_f = \text{John}; \text{Mike}; \text{yesterday}, \text{theme}; \text{Cont}(U_b, U_c)$$

(d) (But) Mike has been acting quite odd recently.

$$C_b = \text{Mike}, C_f = \text{Mike}; \text{Shift}(U_c, U_d)$$

ところで、Grosz の理論では、名詞以外の表現が問題となる。さらに、「昨日」という言葉の文内の位置も、言語によって異なる。「背景副詞」「yesterday-昨日」の位置は、日本語と英語の双方において文の統語構造のプロトタイプに基づいて規定され、情報価値は表現の位置から読み取りにくい。Grosz の「中心化理論」は、表層の語順にかかわりすぎているともいえる。

イ) 「活性化理論」 (Activation Theory, Saliency Theory)

「活性化理論」のほうが、文脈情報を構造化し、細分している点では優位であると考えられる。この理論は、プラーグ学派の機能的生成記述 (FGD) に基づいている。FGD の枠においては、「共有の知識」のストックは、発話者が、聴者の意識に含まれると見る情報を表している。「共有の知識」のストックは、初期段階では発話者の記憶と判断力の瞬時的状況に依存しているが、談話の進行とともに、流動的に展開し続けている。ストック内における個々の項目は、それぞれ異なる活性化のレベルを付与される。中では、他の部分よりアクセスしやすく、分かりやすい部分もあり、また、他のものより言語化しやすい部分もある。Hajičová & Vrbová (1981) は、個々の成分に活性化度合いの値を次のように付記している。

- 1) 項目 a_n が文 S_i の焦点部の中で直接に言及される場合、 $a_n \rightarrow a_0$ 。
- 2) 項目 a_n が S_i の主題の中で、無アクセント代名詞あるいはゼロ代名詞として表される場合、 $a_n \rightarrow a_n$ (そのまま)。
- 3) 項目 a_n が文 S_i の主題部の中で直接に言及された場合、 $a_n \rightarrow a_1$ 。
- 4) すべての a と関連しながら、 S_i において言及されない b に関しては、 $a_n \rightarrow a_m$ ならば、 $b_r \rightarrow b_{m+2}$ 。
- 5) 項目 a_n が文 S_i においては直接にも、間接にも言及されなかった場合、
 - i) 先行文の焦点部の中で直接に言及された a_n に関しては、 $a_n \rightarrow a_{n+1}$ 。
 - ii) S_i においては直接に言及され、また a との連想を持つすべての項目 b に関しては、直接に言及されたすべての a_n に関しては、 $a_n \rightarrow a_{n+1}$ 、 b_n に関しては、 $b_n \rightarrow b_{n+1}$ 。

原理 1 (中略):

「共有知識」のストックにおいては、すべての含まれる項目は、特定の活性化度合いの下限を越えている。

原理 2 (中略):

主題部に含まれる項目は、談話の続きの中で、さらに詳述される予定のものである。

焦点の中に含まれる項目は、ストック内のある項目に関する詳述を展開させている、あるいは、発話者がこの項目を取り上げることにより、他の項目との見損なわれた関連性が浮かび上り、新しく照らされる対象となる。

代名詞化やその他の文脈依存の表現への転換は、活性化の度合いの低い表現から、活性化度合いの高い表現に向かって進んでいる。そのため、代名詞としての解釈の場合には、候補となる先行詞の活性化の度合いが手がかりとなる。

例:

a) John went to his favorite music store to buy a piano.

$$\{j_1 \quad s_0 \quad p_0\}$$

b) He had previously attended the store for MANY years.

$$\{j_1 \quad s_1 \quad y_0 \quad p_2\}$$

c) He was excited that he could finally buy a piano.

$$\{j_1 \quad s_2 \quad p_0 \quad y_2\}$$

d) He arrived just as the store was closing for the day.

$$\{j_1 \quad s_1 \quad d_0 \quad y_2 \quad p_2\}$$

e) It (=the store) was closed.

$$\{j_1 \quad s_2 \quad d_0 \quad y_3 \quad p_3\}$$

が期待されるが、実際には、... s_0 ... となる。

Hajičová の解説によると、言語表現に関する予測が満たされていないが、この事実は、文章の構成に欠点があることを示している。それでも、このモデルの予測力は、Grosz のモデルより高いことが明らかである。例えば、e) の代わりに次の e') を補給すると、前述の問題はなくなり、モデルは普遍的に応用可能となると考えられる。

e') (But he did not buy the piano as) it (the store) was closed.

(しかし店が) 閉まっていた (から、ピアノは買えなかった) のです。

この場合、予測 $\{j_1 \quad s_2 \quad d_0 \quad y_3 \quad p_3\}$ は満たされているが、解釈の難しさは、省略の階層順が適切でなかったこと — すなわち $\{(j_1)s_0 \quad (d_1 \quad y_3 \quad p_3)\}$ でも、 $(j_1 \quad (s_2) \quad d_1 \quad (y_3 \quad p_3))$

でもなく、 $\{(j_1) s_2 (d_1 y_3 p_3)\}$ であったこと — によって説明される。例えば、
e⁹⁾ So, after all, he did not buy it.

のほうははるかに適切な続きであろう。また、この理論は、「中心化理論」の枠では処理不可能であった主題・焦点の区別を積極的に利用している。主題あるいは、その最も一般的な統語的「候補」である主語の位置を、単に「旧・新情報」という概念だけでは処理できないのである。

「三部構造」(Tri-partite Structure)

Hajičová, Partee & Sgall(1998) が論じる Tri-partite Structure (三部構造) の構想においては、主題は「制限子」(restrictor) として、焦点のスコープは「中核スコープ」(Nuclear Scope N) として、「取り立て詞」や疑似分裂構文のコピュラは「演算子」(operator (of focalization)) として組み込まれている。

- (a) He only said that Mary liked the DANCER.
- (a') O only, R he, N said that Mary liked the dancer
- (a'') O only, R he said, N that Mary liked the dancer
- (b) He said that Mary only liked the DANCER.
- (b') O only, R he said (about) Mary N (that she) liked the dancer
- (b'') O only, R he said that Mary liked, N the dancer, 等々

b 純粋な関係表示を表す基層 (basic level)

s 関係表示に特殊な限定を加える上層 (secondary level)

焦点と中核スコープの関係は次のように規定される。

(i)

1) 焦点化演算子の中核スコープは、演算子が所属する主要部 (ヘッド) の最大投射である。

2) 焦点化「演算子」のスコープは、その f-command (あるいは LF における c-command) である。

(ii)

1) F において現れる「演算子」の焦点は、この投射の焦点から CB の諸要素を「外した」ものである。

2) 焦点化「演算子」の焦点は、CB の諸要素を「演算子」の直接の項 (immediate argument) から「外した」ものである。

II. 言語素材の認知的走査のアナロジー・モデル

リズムカルな画面編集のアナロジー

どの項目が次に焦点化されるかという予測に関しては、このモデルは微力で、限られた説明力しか持たない。以下では、意識焦点の移動をモデル化し、言語表現の対象をスキャンニングするシステムの構想を提起したい。現段階では、視覚的に完全に把握可能な場面（「画面」）の「走査」（スキャンニング）を想定し、一般に用いられるテレビ写像・映像の走査方式や取材方式を考える。

音声発生長さ・音節パルスの期間・単語や minimal phrase（橋本文法で「文節」と呼ばれるもの）や節などの長さは、一定の生理的なリズム（例えば息のリズム）によって制御されている。

さらに、対話の場合、発言（「ターン」）のために規定された時間に関しては、対話者の間に「奪い合い」・「譲り合い」が生じ、語用論的な要因が関与する。

発話（文）が替わる切れ目は、次の位置に置かれることが普通である。

- 1) 談話における対話者交換の位置
- 2) 対話者交替と心理的に類似する視点交換の位置

交換サイクルのリズムに関しては、次の仮説を立てることができる。

仮説・表現分割の原理

- a) 視点転換の位置は、リズムカルな単位が交替する位置と一致することが多い。
- b) 継起的に発生するサイクルにおいては、情報価値は、それぞれのサイクルに特有の視点に基づいて決定される。
- c) 視点転換の最小のサイクルは、特定の「視点転換のリズム」に基づいて成立する。
- d) 継起する視点転換のサイクルでは、 n -倍数の周波を特徴とするサイクルと、周波倍数からはみ出たサイクルを区別することができる。

以下では、言語素材の「走査」を規定する、という認知的なアプローチを試み、「アナロジー」としては、テレビ番組作成や編集のシステム・テレビ映像の「パッキング」のシステムなどを考える。

番組編集の原理

テレビ放送においては、取材カメラの選択、カメラ・アングルやズームの選択などが行われる。これらの作業は、具体的な人間の判断に頼っている以上、そもそも固定したリズムに合わされたものではありえない。しかし、それぞれの番組のジャンルと内容に

関しては、取材カメラの切り替え、あるいはアングルや焦点の速度に関しては上限がある。人間の認知力に測定できる限界がある。カメラの動きが速すぎると、画面は認知的に処理不可能となる。また、カメラの動きが異常に遅くなった場合には、受容する主体者の集中力が下り、コミュニケーションが断たれる恐れがある。

各機能体の成立のアナロジー

以下では、テレビ映像の転送や編集方式のアナロジーを用いて、発話・対話・言外・推論のそれぞれの世界における情報の組織原理を図式にまとめた。

「発話の世界」のスキヤニング

<p>言語現象</p> <p>焦点化サイクル・記憶整理サイクルのリズミカルな交換</p>
<p>テレビ・システムのアナロジー</p> <p>横・縦のリズミカルな走査、画面の信号とマスター信号の交替</p>

一定のリズムに即した走査の原理（縦・横の同周期化信号に基づく画面のスキヤニング）

映像の画面が一点の光線の移動によって「走査されている」時、走査光線の先端は、同周期化信号に支えられて、リズミカルに移動する。縦のサイクルは $VC=25/秒$ で、横のサイクルは、日本のテレビ方式の場合、 $HC=525/VC$ である。

対話の成立

<p>言語現象</p> <p>対話者の転換、視点の転換</p>
<p>テレビ・システムのアナロジー</p> <p>カメラの交換、角度や写象技法の再選択</p>

主題の展開

主題の展開は、本格的には発話者独自の意志によって行われるが、文章の一貫性の持続が求められるかぎり、Centering や「活性化」の規則を侵犯してはいけない。この文章の意味的構成の裏に、次の推論の展開を想定する。

言外の世界のスキヤニング

言語的現象

主題の追求（主題の認知的構造の意識的な走査）

グラフ探索のストラテジー：

DFS(Depth-First Search)、BFS(Breadth-first Search)、

The Traveling Salesman's Problem 等

主題の「省略/詳述」のパラメーター

ストラテジー：

システム周辺としての処理（無標）

システム中心としての処理（有標）

適切な「繊細度」のある表現の選択

撮影のアナロジー

カメラの移動

カメラの焦点化

「色」の再生（高周波混合の原理など）

（「一般の画像（白）と特殊な画像（個別的な色）の選択」）

推論の世界のスキヤニング

言語的現象

「可能な世界」からの選択

個々の「主題」間の抽象的な関係の追求

時間の展開や

「因果」「刺激一対応」「目的一目的の追求」

「希望一行動」「希望一行動」「希望一行動」などの追求

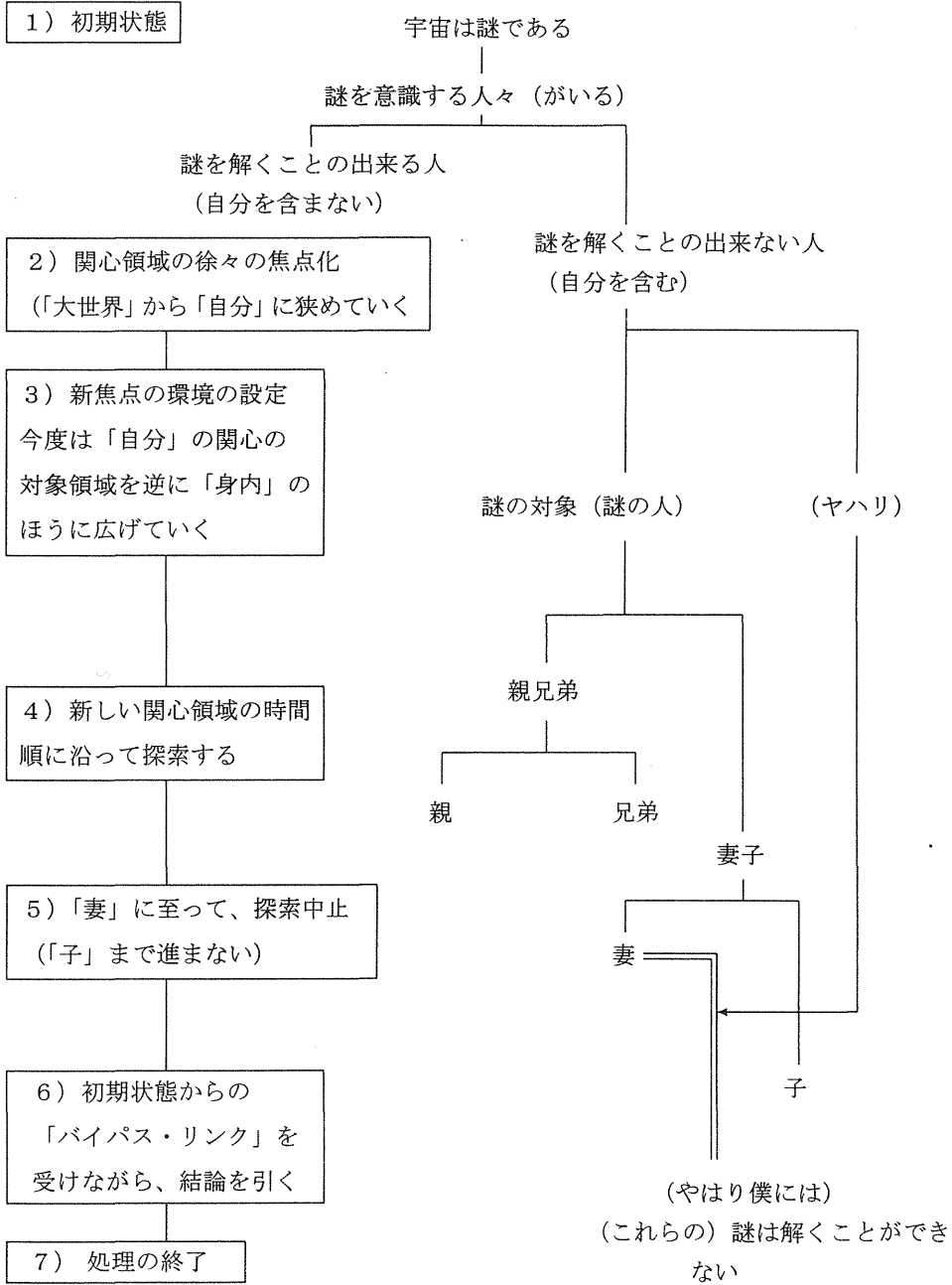
番組作成のアナロジー

（意識的な）番組内容の解説、特殊な技法（画面の分割など）

例(夏目漱石著『虞美人草』の有名な文章部分の分析による) :

宇宙は謎である
宇宙の謎を勝手に解くことのできる人がある (彼らは) 勝手に満足する
謎を解くことができない人もいる
(こうした人の心内では謎が広がり、意識の対象は次のように、ある具体的な焦点から他の焦点へと継起的に移動する)
親
兄弟
妻
これらの人物は、著者が彼らと同心にならないかぎり、皆解くことのできない謎である
親兄弟にはさらに妻を貰う
妻は新しい謎である
(生まれつきの謎に新しい謎を貰う)
謎にはまずい解決しかない
しかも、まずい解決は結局だめだ
(すなわち、宇宙は解くことのできない謎である)

この文章の「深層の主題構造」を次のように図式化することができる。



夏目の推論は、樹図をグラフ探索法で走査すると、通常の「自然論理」(Natural Logic)に基づく「走査」原理を利用しているといえる。いわば、「常識的な推論」の展開に頼っている。しかし、実際にこの推論の展開は「妻」のテーマに至った時点では切断され、「子」と呼ばれる接点の方向には進展しない。ここでは一変して、筆者が仮に「ヤハリ」と名付けるフィード・バックのリンクが活かされ、夏目は、「妻」に関する命題と、「初期状態」にはすでに含蓄された前提との対比・対照によって「結論」を引き出すことにした。

こうしたことから、夏目の考察の狙いは、「妻の謎」を論じることであったことが分かる。すなわち、発話者(著者)が選択された原則を途中で捨てないかぎり、発言(文章)の「てんまつ」はある程度予測できるが、この戦略はどこまで続き、どの段階において中止されるかは不明である。

適切な詳しさを持った表現の選択・「高周波混合帯域」の原理のアナロジー

テレビの画面では、異なる光度についての情報(「白黒」の信号 Ey)が幅広い周波帯域を占めているが、色(「赤」Er, 「青」Eb, 「緑」Eg)に関する情報は、二つの狭い帯域に限られる。

高周波の詳細な情報に関しては、色の区別はなされず、繊細な情報は三色結合の形で伝わる。この原理は、色の対立に関する人間の識別力が、色とは無関係の光度に関する識別力より遥かに低い、という認知的な事実を踏まえている。

要するに、システムのある情報、具体的な、明示的な形で、システム周辺の情報は、抽象的な、暗示的な形で転送されるといえる。

スケールの細かさの選択 - 「無標」の表現のほうが区別される例 -

パラメーター：移動の速度

ア) 区別が明確な帯域(低速度)

人間の移動	車の移動
人がゆっくり歩いている。	車がゆっくり走っている。
人がのろのろ歩いている。	車がのろのろ走っている。
人が歩いている。	車が(のろのろ?)走っている。
人が早く歩いている。	—
人がのろのろ走っている。(?)	車が走っている。(?)

イ) 混合が生じる帯域 (高速度)

人が走っている。	車が走っている。
人が早く走っている。	
?	車が早く走っている。

こうしたスケールの中の表現は全体として、同位置レベルの「情報価値」を持つことがある。

B. 日本語とチェコ語における「主題／焦点」の分節の比較

主題・焦点の分節に基づいた深層の語順・表層の語順の相関

低度の情報価値を持った情報は「旧情報」として、高度の情報価値を持った情報は「新情報」として受けとめられる。ところが、伝達のプロセスにおける実際の情報価値は、発話者による聴者の意識状態の評価に基づくものである。すなわち、情報価値の度合いから、ある事柄が実際にすでに言及されたかどうかは、導き出すことはできない。具体的な発話場面において、実際の情報価値への手がかりは、まず成分の省略可能性についての判断である。

情報構造の「基層レベル」は主節と対応するレベルの情報構造で、文中の成分の省略可能性によって表される。

[1 {{2 ウィンドウを開けたら、
 {3 いくつかは 3} クローズしなければならないが、2} /
 トル {4 ウィンドウを 4}} 1]
 クローズしても ~~1~~ {5 {6 その 6} クローズした 5} 文書は
 {7 メモリーから 7} なくな [る//り//...] {8 わけで 8} {9 は 9}
 (し) ない。 (「ウィンドウズ 95」の説明書から)

1行アケ [1 {{2 Pokud otevřeme {9 některé 9} okno,
 musíme je {3 {10 někdy 10} opět 3} zavřít 2} {6 ale 6} /
 i když {4 okno zavřeme 4} 1], {5 {6 takto 6} zrušený 5}
 text se {7 v paměti {8 počítače 8} 7} nevymaže.

// "or" / "and/or"
 1行アケ
 3行アケ

情報の省略は、上位概念による表現の置き換えによっても行われるが、ここで挙げられる表現の省略は、ただ一つの可能性にすぎない。また、情報の「縮約」も可能である。

発話の焦点

最高度の重要度を持ち、さらに最も省略し難い成分は、発話の焦点である。

情報の重要度は三類型に分けられる。

言語の差による情報構造の働きの特性

二成分の文の場合

具体的な言語グループ — 日本語・チェコ語・ドイツ語・英語 — における OV/VO の順に関しては、入れ替え可能性の例を挙げよう。

(1) 無題文 (無標の語順)

日本語

雪が降っている。(助詞「が」)

チェコ語

Padá sníh. / Sněží. (無標の語順)
(降る、雪が / 「雪-する」)

ドイツ語

Es fällt Schnee. / Es schneit. (無標の語順)

英語

The snow is falling. / It is snowing.

(2) 有題文 (有標の語順)

日本語

雪は降って (は) いる (のだ)。(助詞「ハ」・プロミネンス)

チェコ語

Sníh padá. (雪が、降る) / Sněží.
(有標の語順・プロミネンス) (降る、雪が / 「雪-する」)

英語

The snow is falling./It is snowing. (プロミネンスのみ)

ドイツ語

Schnee fällt./Es schneit. (有標の語順・プロミネンス)

これらの言語における統語構造のプロトタイプを図式化すると、次のようになる。

日本語	文頭の成分	「は」の位置	格成分等	述語詞
チェコ語	文頭の成分	第一述語詞	第二述語詞等	—
ドイツ語	文頭の成分	第一述語詞	—	—
英語	主語/there	第一述語詞	背景副詞/主語	第二述語詞
	文頭の成分	—	—	(その他)

日本語はいわゆる SOV 言語であるのに対して、チェコ語・ドイツ語・英語は共に SVO 言語である。この事実は、統語構造のプロトタイプの問題で、情報構造に関して重要なのは、当該の言語における語順の「自由度」だけである。チェコ語の語順がドイツ語の語順より、またドイツ語の語順が英語の語順より遥かに自由であるが、語順の自由度が高い言語のほうが、情報価値の度合いをより正確に反映していると思われる。

チェコ語では、(1)、(2) に共通する成分は二様に配列される。(1) は無題文であり、その情報構造は未分節であるが、(2) は有題文であり、その情報構造は主題と焦点に分節される。

(1) においては「雪」の概念は、聴者の従来の知識や関心領域の状態がいかなるものであることとは無関係に登場する。一方、(2) の表現形式の場合には、「雪」の概念は発話者・聴者に共通する知識や関心の領域にはすでに含まれているが故に、「雪は」の部分は導入済みの「主題」であるといえる。導入済みの「主題」は省略しやすいために、その情報価値は未分節構文における「雪が」の部分より低い。

チェコ語においては、文脈非依存の文が二つの未修飾成分 — 主語と述語 — の結合によって形成される場合には、主語は文末にあるが、構文が主題化によって分節される場合には、情報価値が下り、主語は文頭の近くに配置される。

これに対して、日本語の未分節構文と分節構文の双方においては語順は同じであるが、「主題」に係助詞「は」が付与される。

また、普遍的な分節構文においては、格関係無表示の成分 — すなわち「場」・「時」・「状況」・「文モダリティー」などの、渡辺 (1996) のいう「誘導副詞成分」 — も登場することがある。日本語においては、「は」の付いた成分は、こうした「誘導成分」が分布する領域に含まれ、格関係を表す領域から外される。

「誘導成分」と「主題」・「焦点」に含まれない部分を「移行部」(transition) と呼ぶ。語順自由度の高いチェコ語では、情報価値の上昇型に従う文成分の並び方が普及しているが、英語のように、語順が厳格に制限される言語では、この語順が一般的である領域

は、次の例のように、統語構造のプロトタイプ(SVO)が侵犯されない場合にのみ限られる。

He walked across the room and gave the package to Mary.

He walked across the room and gave Mary the package. (Cowan 1985 による)

Downing & Noonan (ed.1995) は、この現象を支える原理を OTFP (Old Things First Principle) と呼ぶ。

三成分以上の文の場合

英語では、語順に関する規制が強いため、情報構造を表すことは語順だけではできない。これに対して、チェコ語の語順は、前掲のように、「情報構造」をかなり忠実に反映していると思われる。しかし、チェコ語の「三成分以上の文」においては、「仮想の現実」を題材にしないかぎり、「現実の世界」に対する「弱依存」が生じ、語順の自由度は下がる。アクセントが弱まることによって、述語はいわゆる Wackernagel 位置に移動する。本論では、この現象を「疑似の前接辞化」と呼ぶ。

明らかに、チェコ語では、いわゆる「現実の世界」の他に、非現実法の条件文で表現される「非現実の世界」と「仮想の世界」のメンタル・スペースを表す表現は明確であるが、こうした抽象概念の区切りの違いは、前述の「スキャンニング」方式にも、何らかの影響を及ぼしかねないと推定される。この点は、今後さらに検証するべきであろう。

チェコ語では、この現象の影響によって、文型「学生が門に立っていた。(Stál student před branou. (立った、学生が、門の前に) Student stál před branou.)」と文型「学生は門に立っていた。Student stál před branou、もしくは Student stál před branou」との間の対立が失われ、双方とも同じ語順に準じることになる。

補助的な情報と文法的な情報

発話の焦点を正しく理解するためには、この焦点と合致しない補助的な情報も重要である。筆者はこの情報に付与された情報価値を「誘導された情報価値」と呼ぶことにする。また義務的な文法的な情報も、所与の表現には必然的に伴い、省略不可能である。

一次の付随的な情報

認知言語学の観点に立つと、「主題」は、発話の認知的情報を理解するために不可欠な補助的な情報である。すなわち、主題も、その情報価値が焦点より低いにもかかわらず、「有題文」においては、一度省略した主題を補給しないかぎり、焦点を正しく理解する事はできない。

二次の付随的な情報

認知情報を支えるのは、時間・場所・状況・「前提との関係の問題意識」などを表す上記の表現と、「発話の成立を根拠づける現象」（「なぜこのことを言っているか」という説明の表現 — すなわち誘導・背景・接続の副詞や誘導副詞・接続詞など —）である。

いわゆる「主観的語順」

いわゆる「主観的語順」は、文頭の情意的な重要度を反映し、焦点を文頭に配置するものである。この配置によって、発話者は自らの感情のみを配慮し、聴者が伝達機能に求める情報流の展開という要求を無視すると考えられる。

いわゆる「客観的語順」

典型的な「主観的語順」の規定から明らかであるように、いわゆる「客観的な語順」は表象機能と伝達機能のみを基にし、「既知の情報」から「未知の情報」へと展開しているといえる。

チェコ語・日本語における情報価値の表し方

焦点・主題の外に、文は「移行成分」(transition)を含むことがある。

「移行成分」の情報価値は「主題」より高く、「焦点」より低いが、その構成もさらに重層的であり、多段階の「情報価値」を持つ普遍的な「深層の語順」に従っていると思われる。

すなわち、「主題部」・「焦点部」の2分化と並んで、微妙な多段階のスケールも併存すると思われる。

次の例から明らかであるように、重層構造は一つの焦点に向かって展開する。

Po-ulici si-vykračuje Karel i. (PRO) Jde dost rychle.

道を 歩く カレルが 歩く かなり 早く

(a) 1——— 2———

(b) 1—— 2———

(c) 1—— 2——

この例では、副詞“dost”（「かなり」）は二次の（補助的な）情報である。例えば、「ゆっくり走っている」のとは異なって、副詞“dost”は省略可能で、それを支配する主要部（“rychle”「早く」）のほうが、情報価値は高い。

重層の情報構造は、チェコ語ではまず語順・イントネーション・取り立て詞の使用な

どによって、日本語では、まず助詞「は」の付与によって、表示される。

情報構造の表示法

情報構造の表示においては、数字 (1、2、...) は、情報価値が上昇する順序を示し、同一の情報価値を持つ成分には、左から右に向かう順で、アルファベットの文字 (1a、1b、...) による符号を施した。「←」は情報価値上昇の方向を示すが、この矢印を情報価値の表示を説明する条項においてのみ用いることにする。

(a) 未分節構文

車がいきなり止まった。

1—————

窓が割れた。

1—————

眼鏡がなくなった。

1—————

(a) においては、それぞれの例の背景は異なるが、すべての例は談話の冒頭文として、または「どうした」という疑問に対する回答として、適切であろう。

(b) 分節構文

(i) 単層構文

基層構造においては、情報価値の配置に基づく文の分節は、チェコ語では述語詞の位置によって、日本語では助詞の位置によって示される。

窓は → 割れた。

1—— 2——

(=どのような事態が発生したかといえば、最悪のものだった。)

(bi) は、「Xはどうした」という疑問に対する回答である。「は」が配置される位置において情報価値が上り、文章の続きは省略不可能となる。

(ii) 重層構文

重層構造においては、文のレベルを基層構造とし、括弧に入れた小文字 (a) によって表す。また、基層構造以外の階層を (a),(b)... とする。

最悪の ← 事態が ← 発生した。

(a) 2————— 1—————

(b) 2————— 1—————

(bii) において見られる「が」は情報価値が下降しない位置においてのみ使用できる。「対比的主題化」と「対比的焦点化」の文型も「重層の情報構造」を持った文型である。

a) 「対比的主題化」

いわゆる「対比的主題化」の表現を含む文では、情報構造は重層的に積み重なっているだけでなく、重複する情報構造の階層間には、一定の対立性が認められる。

情報構造の「基層レベル」は文レベルの現象であるが、対比的主題化は文レベルには限られず、独自の情報価値の階層に所属していると思われる。すなわち、対比的主題化は文より小さい機能体の中においても現れうる。日本語独自の助詞「は」の外に、両言語では語順、語彙的・音声的強調、特殊なイントネーション・パターンなどが用いられる。「対比的主題化」は、通常の「主題化」が起こしにくい「気象文」・「感情文」・「気づき文」、さらに命令文・修飾節などにおいても出現する。

肉はあるが、 ご飯は ない。

(a) 1——— 2———

(bx)1— 2—— (by)1—— 2——

あられは降った けれども、 雪は 降っていない。

A x——— Conj —— y———

B 1—— 2—— 1—— 2——

Kroupy padaly, ale sníh ne (=nepadal.)

A x——— Conj y———

B 1—— 2—— 1—— 2——

あられは ふった 接続詞 雪が 否定

対比的焦点化の焦点が基礎レベルと一致する場合には、文の疑似分裂が生じることがある。

b) 「対比的焦点化」

次のような通常の焦点化もある。

太郎が 来た。

Přišel Taró.

来た 太郎が

と並んで、次のような「対比的焦点化」もある。

来たのは (花子ではなく) 太郎だ。

Nakonec (nepřišla Hanako,ale) /přišel Taró.

結局 ((来なかった花子がけれども) / 来た太郎が

日本語では、いわゆる「疑似分裂文」を使用するが、チェコ語では、以下で説明するように、「疑似分裂文」は、語順の固定化がチェコ語より進んだケルト語派の言語から影響(「ガリシズム」)としてのみ、言語システムの周辺において成立する。

c) 重複の情報構造(特殊な「取り立て」構文)

焦点が重ならない二つ以上の情報構造の併存を「重複」と呼ぶことにする。重複する情報構造は常に対比的な関係にある。

基層レベル以外のレベルに所属する焦点は、取り立ての助詞や副詞・イントネーションセンターの位置などによって示される。

本論では、「演算子」の一類と見なされうる助詞「だけ」を付与した成分は、「基層構造」においては「主題」であるが、「上層構造」においては「焦点」となっている。

	太郎	だけが	日本語が	話せる
A	1	—————	3	—————
			2	—————
B	2	—————	1	—————

「重複の情報構造」を可能にしているのは、「取り立て詞」の「演算子」機能であり、二つの命題が一つのセンテンスの中で「融合している」。

日本語とチェコ語の対照分析

手がかりとなるチェコ語の語順

通説では、チェコ語の語順は自由である。しかし、実際には、緻密な比較対照を試みた場合には統語構造のプロトタイプと音声プロトタイプの相関は無視できなくなる。

日本語とチェコ語における統語構造のプロトタイプ

チェコ語と日本語における統語プロトタイプを検証する対比表は、佐伯(1976、1998)と Sgall 他(1980)のデータに基づいている。チェコ語の分析表は文の文脈非依存部分のみを捉えているが、文脈非依存部分の語順こそ、文の統語構造のプロトタイプを直接に反映していると思われる。

チェコ語 (文脈非依存の部分)	日本語	
Sgall 他による	佐伯による	
	感動 接続 ◆題目 (主題、提題) 時 (名) 評釈 時 (いつから) 呼応 時 (に)	広域
■作業主 時間 (いつ) (いつから) (いつまで) (頻度) (期間) 場所 (どこ) 方法、仕様 ○程度	■主体、主格 時 (いつまで) 時間情態 位格 で (場所) 数量 場所 (から) ■相手 (と) ○原因根拠 ■相手 (に) ○程度 ところ (を) 「情態」	中域

規模	ところ (まで)	狭域
道具 (手段)	資格	
方向 (どこから)	○目的	
宛先	方法	
起源	内容	
基点 (どこから)	基礎基準	
■受け手	■対格	
方向 (どこへ)	■引用	
結果	「着格」	
条件	結果	
目標		
○原因		

チェコ語と日本語の統語構造のプロトタイプを対比する表が、成分の位置を明確に示さないのは次のような場合である。

- 1) 当該の成分の位置が述語の位置に依存している場合 (○記号)
- 2) 成分の位置に関して、述語の位置との関わり合いが予測されるのに、両言語の間には、成分の位置が一致している場合 (■記号)

述語の位置を例外として、SVO 類型の言語の語順と、SOV 類型に所属する日本語の語順は、述語詞の位置を除いてほぼ一致している、という Pesetsky(1995) の説はほぼ裏づけられる。Pesetsky は、日本語と英語の対照分析をもとに、日本語の深層構造における動詞の位置を文頭に配置することを提起したが、この分析は、情報構造における語順を「深層の」語順として捕らえようと思ふかぎり、無題文にしか適用できない。

さらに、チェコ語における文脈依存性のない発話では、述語詞は文冒頭の位置を占める傾向が認められる。このことから、文脈依存性のない環境において、最も自然な語順は VSO 語順で、この語順こそ、深層でもあると考えられる。

日本語とチェコ語の両言語においては、述語以外の成分の配置は著しく類似している。日本語の情報構造においては、述語は情報価値の度合いに伴って変動するが、その統語構造のプロトタイプにおける理想的な位置は固定している。本論で深層の役割を果たす情報構造においては、「は」成分を含む文においては述語の位置は「は」成分の直後には配置され、「は」成分を含まない文においては、述語詞は焦点でないかぎり、文

頭の位置に配置される。

上記のことから、チェコ語と日本語の「深層」語順の位置を、次のようにまとめることができよう。

主観的語順の場合には、述語は焦点と一致する、あるいは焦点の直後に配置される。

客観的語順の場合には、述語（「動詞」）は有題文においては主題成分の直後に、また無題文においては文頭に立つ。

「主観的語順」の文型（下降型）

To mne pan-Takada zachránil.

不変詞 僕を 高田さんが 助けた （高田さんは僕を助けた。）

To pan-Takada mne zachránil.

不変詞 高田さんが 僕を 助けた （高田さんが僕を助けた。）

「客観的語順」の文型（上昇型）

Zachránil-mě pan-Takada.

Pan-Takada-mě zachránil.

「疑似分裂文」（上昇型）

僕を助けたのは 高田さん（だ（った））。

Kdo mě zachránil, byl pan-Takada.

関係代名詞 人称 述語 述語 高田さん。

チェコ語の語順は自由なので、疑似分裂文を用いる必要はない。そのため、疑似分裂文の使用は、極めて特殊な状況に限られる。

本主題

「本主題」は、基層の情報構造における名詞句の主題化（すなわち対比的でない主題化）によってのみ得られるが故に、両言語では、本主題化は主節においてのみ成立する。チェコ語では、この現象を、「主題化した」成分を文頭に向けて移動することによって表す。ところが、日本語では、助詞「は」の使用は義務的であり、語順の変化はイントネーションを助けるだけで、事実上任意的である。

Padá sníh.

降る、雪が

確かに、雪は降るのだ。

Jistě, sníh padá.

人が来た。

Přišel nějaký pán.

来た、ある、人が。

あの方は来ました。

Ten pán přišel.

あの、方が、来た

扉が開いた。

Otevřely-se dveře.

開いた、扉が。

直ぐ後で、あの扉は開いたのだ。

Hned-nato se (ty) dveře otevřely.

直ぐ後で あの 扉が 開いた (のだ)。

本主題化は重層になっていることがある。日本語・チェコ語の双方においては、この階層性は語順に基づいている。

この 本は (私は) 読んでいない。

Tuto knihu jsem-(já)-nečetl.

この 本を 私は 読んでいない

本主題化は、客観的な語順の文型における基層の情報構造に所属する通常の、無標の現象で、音声的プロミネンスの付加を必要としない。

日本語特有の「主題・焦点分節」関連の現象

統語構造のプロトタイプに基づいた表現の特徴

日本語の文においては、述語は省略しにくい。すなわち、具体的な指標を省略しても、「指定助動詞」が用いられることによって、形式的な「述語らしさ」は保たれる。

(僕は) 鰻 (を食べる)。

((Já) budu-jíst) úhoře. →

私 食べる (未来) 鰻を (僕は) 鰻 (だ)。

((Já) ("mám")) úhoře.

私 持っている 鰻を

チェコ語は、対格言語であるために、対格類型においては、代用詞 mít 「有する」を目的語として想定し、対格言語の統語構造のプロトタイプに基づいて、第二の名詞句を目的語格にする。一方、日本語では、依存型文法のプロトタイプに基づいて、形式的

「コピュラ」を加えて、形式述語を補給することになる。

形容詞・形容動詞述語の文

文章の冒頭文として、形容詞文や名詞述語文の使用は希である。前述のように、実際の現実の世界を述べ立てる際に、これらの文は、文脈依存の発話としてのみ現れる。「無標」の用法および文頭における用法の場合、文は常に有題で、無標の用法の場合には主語、有標の用法（いわゆる総記の用法）においては、逆に「述語」が主題となる。

この本はおもしろい。

Tato kniha je-zajímavá. (状況指示や文脈指示)

本はおもしろい。

Knihy jsou-zajímavé.

この本がおもしろい。

Co je-zajímavé, je tato kniha. / *Tato kniha je-zajímavá.*

おもしろいのはこの本だ。

Zajímavá-je tato kniha.

おもしろいのはこの本(だ)。

名詞述語を持った文類型の特性は、助動詞「のだ」や、助動詞相当句「訳だ」・「からだ」・「筈だ」などによって表される。また、接続成分や誘導成分（例えば「実は」・「つまり」・「すなわち」・「結局」・「というのは」）も、文に静態的な判断類型の性質を加えていることがある。

日本語特有の「突然文」「気づき文」「主述類義語反復文」の特性

以下で挙げる類の文例は、「Xはどうした」という疑問に対する回答ではなく、「どうした」というような、状況の説明を求める疑問に対する回答、あるいは談話・文章の冒頭発話としてのみ用いられる。

Je-mi zle.

ある(私に) 悪く

火が燃えつづけている。

*ještě hoří oheň/

(*oheň) ještě hoří

火が まだ 燃えている

日本語の「突然文」も「無題」で、発話が主題化によって分節される前の段階を表している。この表現類型の場合には、発話者が文の分節を実施するのに十分な時間が与え

られていないと思われる。チェコ語でも、この文は、統語構造の基本プロトタイプに従う。

ああ、財布がない。

Kriste-pane, peněženka je-pryč! /?? Kriste pane, pryč je peněženka!

イエーズ様、財布は なくなっている

あら、空が赤い。

Podívej, nebe je-celé-rudé./?? Podívej, celé rudé je nebe!

見て、空は 真っ赤だ

先のジープがいきなり止まったよ。

Najednou ti ten džíp přede-mnou zastavil. /

突然 君 あの ジープは 僕の前で 止まった。

?? Najednou ti zastavil ten džíp přede mnou.

つまり、未分節文の場合、基本文の統語構造のプロトタイプのみが意義を持つ。チェコ語の統語構造のプロトタイプはSVOであるために、こうした文は有題文と同じ形を取る。ちなみに、これらの件では、「新機能主義」を唱える Givón(1995)の考え方とは対照的に、「統語レベル」の現象が「語用論レベル」の現象より優先的に処理対象となっているといえる。

チェコ語特有の、「主題・焦点分節」関連の現象

チェコ語の無前提疑問文のプロトタイプ

チェコ語の無前提疑問文では、wh-移動変換は義務的で、疑問詞疑問詞疑問文においては、疑問詞が文頭に立つ。

Co koupil Karel ?

(何を 買った カレルが)

一方、日本語では、この類の文は普通の平叙文のプロトタイプに従う。

カレルは何を買った。

選択肢の選択を求める選択疑問文および可否疑問文においては、述語は文頭に立つ。

チェコ語などの印欧語族の諸語においては、これらの疑問文では主観的語順のプロトタイプが適用され、述語は文頭に配置される。このことは、述語が可否疑問文の焦点となっている肯定・否定のモダリティ階層の表現を含む結果であろう。

チェコ語における確認疑問文のプロトタイプ

確率性・証拠性の前提を含む確認疑問文では、日本語とチェコ語の両言語においても、平叙文プロトタイプの選択は可能である。しかし、確認疑問文の場合にも、モダリティ・マーカ（*Že...* など）は、無前提疑問文と同じように、文頭に立つ。

Pavel mluvil s Honzou, že ? / *Že* Pavel mluvil s Honzou ? / Nemluvil Pavel náhodou s Honzou ? パヴェルはホンザと話したのではないか。 / パヴェルはホンザと話したって？

Pavel mluvil s kým ? / S kým (že) (to) Pavel mluvil ?

パヴェルはだれと話したんだ？ / パヴェルはだれと話したって？

ここでは、“*že*”は確認疑問を表す不変化詞であり、“*to*”は強調を表す不変化詞である。)

チェコ語における物語・冗談などの「可想現実の世界」についての文章冒頭の特徴

現実の世界ではなく、「仮想現実」、すなわち「物語」の世界を述べ立てる場合にかぎって、文脈・状況に依存しない非依存型の文章冒頭文の使用が可能となる。このような文脈状況においては、前掲の「弱依存性」さえ成立せず、また、三成分以上の平叙文においても、述語の文頭位置は可能である。まず、現実の世界についての弱依存性の文を挙げよう²。

“*Představ si, co se včera stalo. Nějaký pan Tanaka přišel k nám do školy, a jen tak beze všeho nás pozval do Japonska.*”

(昨日起こったことを想像しなさい。学校に田中さんという人がやってきて、その場で私達を日本に招いたのだ。)

“*Přišel k-nám nějaký pan-Tanaka do-školy, a jen-tak beze-všeho*
来た、私達の所に、ある、田中さんが、学校に、そして、そのまま、
nás pozval do-Japonska.”

私達を、招いた、日本へ

この文例では、冒頭文の「田中さん」は初めて登場した「新しい人物」で、すなわち、この表現の提出自体は「新情報」である。さらに、この発言は、実際の「現実の世界」を述べ立てる文脈に囲まれるために、述語詞の文頭位置は容認不可能である。

結局、「三成分以上の文脈非依存文」においては、述語詞の位置は、ドイツ語文の動詞と同じように、「Wackernagel 位置」である。

²1998年11月4日のプラハ講演の際、Sgall氏とHajičová氏に訪ねて確認したところ、チェコ語の三成分以上の文においては、述語詞が文の前接辞の位置に配置されることは、「仮想現実」を語る文章（「物語」）の冒頭に限られ、この条件が満たされない場合、「疑似の前接辞化」が生じる。しかし、このいわば「当然の」事実を指摘する文献は見当たらない。

この位置に関しては、筆者は、「前接辞化」と「疑似の前接辞化」を区別している。真の「前接辞化」の場合、一～二音節の述語詞はアクセントを任意に失う。また、「疑似の前接辞化」の場合、述語詞はアクセントを保持しながら、文や自立性のある phonological phrase（「文節」、tact）の中では、初頭位置においては出現しにくい。すなわち、“Do školy přišel k nám...”や“Do školy k nám přišel...”などは可能であるが、文が文脈非依存のものであるかぎり、“Přišel k nám do školy nějaký pan Tanaka”、あるいは“Přišel nějaký pan Tanaka k nám do školy...”という形式は成り立たない。

この文は、「仮想現実」を語る文章の冒頭文でないために、談話冒頭の位置は容認されていないのである。例えば、“Co se stalo?”「何が起こった。」「どうした。」などのような、いわゆる文脈非依存文による答えを求める疑問文表現に対しても、三成分以上の述語詞冒頭文は存在しえない。また、この応答文は現実の世界に所属する以上、常に文脈あるいは状況への依存性を表し、「弱依存性」を伴う。

一方、次の物語の例では、「物語」に含まれない冒頭の「形式疑問文」の続きとして、述語の文頭位置のほうが自然である。

“(Znáš tuhle anekdotu?) Přijde pan Novák do pokoje...”（このジョークを知ってる？）ノヴァークさん（というものが）が部屋に入ると…

“Byl jednou jeden král.”

あった 昔 ある 王様が /（昔々、王様がありました。）

Vejde František do pokoje a povídá...（フランクという人が部屋に入ってきて・・・）

Přijde pan Novák na hranice a celník se ho ptá...（ノヴァークさんという人が国境に来ると、税務官は彼にこんなことを聞く・・・）

チェコ語では、この発話は、「三成分以上の文」に関する規制を侵犯している。従って、この特徴を持った平叙文は疑問文として解釈される傾向がある。

(??) Přišel sem nějaký pán asi před hodinou pro noviny.（ある人が約一時間前に新聞を取りに来たのだ。）

これらの例は、皆同じ物語の冒頭文に属する点において一致している。「フランク」もまた、「ある王様」という文と同様に、文脈依存性は全くなく、語り手と聞き手が所属する世界とは全く別の物語の世界に所属しているが、日本語においては、「仮想現実」の原理は成り立たないようである。

チェコ語における疑問詞との類推による否定代名詞・不定代名詞の位置

次のように、客観的語順をもつチェコ語の文では、不定代名詞は文脈依存性のない情

報を表している。日本語でもこの場合、助詞「は」を使用しない。

Někdo přišel. / * Přišel někdo.

* だれかは来た。(= *人は来た。) /

だれかが来た (=人が来た)。

「疑問テスト」(Question Test)の応用から分かるように、“někdo”という表現は、既知の人物を示していないかぎり、「焦点」のみを表しているはずである。

ただし、不定・否定の代名詞は、疑問代名詞に基づく派生を中心に作成されている以上、チェコ語では、疑問詞類推の力が働き、文頭に立つ傾向が強い。

Co se stalo? Někdo přišel.

どうした。だれか(が)(=人が)(来て)いる。

Kdo přišel? ?? (Přišel) někdo.

だれが来た? ?? 人が(来たのだ)。

一方、否定代名詞を使用した場合には、二つの可能性がある。

Co se stalo? Nikdo nepřišel.

どうした? だれも来ていない。

Kdo přišel? (Nepřišel) nikdo.

だれが来た? だれも 来なかった/来ていない。

これらの用例では、疑問代名詞を主語としたチェコ語の文は「三成分以上」のものであり、その述語詞の「前接辞化」は義務的である。

B のまとめ

以下では、情報価値の表示を複数の階層に分け、日本語とチェコ語における情報価値の表し方をまとめた。

1) 日本語とチェコ語に共通する現象

T F A の第 1 類型：無標（無強調）	T F A の第 2 類型：有標（強調）
-----------------------	----------------------

a) 叙述文（「中立叙述」）

文は無題のままである：

太郎が来た。

Přišel Pavel.

主語は文脈依存に基づいて主題化される：

(太郎は) 来た。

(Pavel) přišel.

b) 判断文

i) 属性文

主語は自動的に主題化される：

— — — —

— — — —

(海水は) 冷たい。

(Voda v moři) je studená.

象は鼻が長い。

述語は文脈依存に基づいて主題化される：

太郎が (来た)。

(Přišel) Pavel.

海水が (冷たい)。

Voda v moři (je studená).

象が (鼻が長い)。

ii) 指定文

主語は自動的に主題化される：

(この彫刻は、) 去年の発掘調査で
見つかった名物だ。

(Tato socha) je cenný předmět,
objevený při loňských vykopávkách.

述語は文脈依存に基づいて主題化される：

(他の彫刻ではなく、)

この彫刻が (・・・)。

(Jedním) cenným předmětem ... je
tato socha.

iii) 同定文

主語は自動的に主題化される：

(去年の発掘調査で見つかった
名物は、) この彫刻だ。

Cenný předmět, objevený při loňských
vykopávkách, je tato socha.

述語は文脈依存に基づいて主題化される：

この彫刻が、(去年の発掘調査で
見つかった名物だ)。

(**Právě**) **tato socha** je
(onen) cenný předmět ...

T F A の第 3 類型

a) 超文的 (hypersyntactical) な単位の構成

* 象は鼻が長い。自然に進化した。

象は鼻が長い。自然に進化したのだ。

「鼻が長い」のは象の属性であるが、「自然に進化した」のは鼻の属性で、「のだ」は、
第一発話における「主題・焦点」のスコープに再解釈を加えていると考えられる。

? Slon má dlouhý chobot. Přirozeně se vyvinul.

Slon má dlouhý chobot. *Tak* se přirozeně vyvinul.

b) 文と連文中間の単位の構成

(自立可能ないわゆる「永遠真理」を表す命題)

(To ví každý (, že) pes štěká [/*štěká pes].

犬は吠える (、そんな) ことは当たり前だ。

この文では、「ことは当たり前だ。」のほうが省略しやすく、「犬は吠える」はその独立可能性のために、修飾節に対する規制から外れている。

c) 前提の修正・否定・確認

i) 予測される命題の評価が確認・否定、あるいは修正される場合

Zvládnout simultánní tlumočení za čtrnáct dní(? To) je vyloučeno.

同時通訳は2週間で覚えるもので(あると思う? そんなこと)はありません。

ii) 予測が異なる命題の融合

Jen Jan to ví. (Jan to ví. A ví to pouze Jan.)

太郎だけが知っている。(太郎は知っている。さらに、知っているのは太郎だけだ。)

iii) 命題の予測が異なり、対比命題への分割が可能となる場合

(Je možné,) že by s Lucií mluvil, a s Karlem ne ?

光子とは話したが、太郎とは話していない (、そんな) ことはあるというのか。

T F A の第 4 類型

聴者の知識への配慮が文・節の途中で変わる場合

Tak tady ho máme, Honzu.

(さあ、ここで、彼を、私達は持っている、ホンザを)

なんだ、ここにいたか、太郎が!

2) 日本語特有の現象

T F A の第 1 類型の場合

a) 無強調の焦点化は、各種の文においては述語について、さらに判断文の場合には、主語について表示することはできない。

(「鼻が長いのは象だ。」と同じ内容を表す「象が、鼻が長い。(?)」・「鼻が長い、象が。」のような特殊な表現は第 1 階層から外れている。)

b) 成分の移動は、主題部・移行部・焦点部という統語帯の域内においてのみ許容される。

「小野田さんは (ジャムを) (パンに) 乗せた。」

「小野田さんは (パンに) (ジャムを) 乗せた。」

c) T F A の第 2 類型 (強調焦点化) の場合

(i) 聴者の知識を配慮した場合 :

日本語では、主題部帯域・移行部帯域・焦点部帯域を区別しよう。TFA の第 2 類型において、主題化は上記の統語帯域を越えた成分の左向きの移動によって、焦点化は統語帯域を越えた成分の右向き移動によって表される。

「なぜ皆、あの田中の家を知っている?」「それは、僕が教えたのだ。」

(ii) 聴者の知識を配慮しない場合 :

古典の係り結びの文型における「焦点化」を、統語帯域を越えた成分の右向けの移動によって表す。

「(駒並めていざ見に行かむふるさとは) 雪とのみこそ 花は 散るらめ「古今 111」
(「・・・桜の花は全く雪のように散っているだろう」)

ただし、現代の文章語でも、この類の移動は認められている。

「捨て子に行く世之介の場面が、・・・笑いの対象として描写されているわけだ。「笑い」への転じ。生真面目に受け取れば、それは多分に不謹慎でもある。しかし、だからこそ、西鶴は敢えて転じたのではなかったか。」(＝しかし、西鶴が敢えて転じたのは、そのためではなかったか。)

(iii) (i) 型と (ii) 型の融合 :

「田中の家を教えたのは僕だ。」(「僕だ、田中の家を教えたのは!」)

「そこにいる、田中の家を教えた人が!」

d) T F A の第 3 類型・第 4 類型

において感嘆文は次の特性が認められる。

i) 通常の間嘆文 (聴者配慮の形式)

「財布はない。」

(Ta) peněženka nikde !

ii) 突然文・気づき文

a) 聴者不配慮の形式

「財布がない!」

* Nikde peněženka !

b) 聴者配慮の遅れ+述語焦点化の形式

「ない、財布は。」

Nikde není, (ta) peněženka !

c) 聴者不配慮+述語詞の焦点化

「ない、財布が！」

?? Nikde není, peněženka!

これらの日本語の用例において、主題化が阻止されることは、聴者不配慮の要因だけでは説明できない。日本語の突然文「財布がない！」は、財布の属性のうち、「僕の持ち物の中にある」という属性があり、発話者がこの属性を否定するために、「違う財布」に言及しているかのように受けとめられる。

3) チェコ語特有の現象

a) TFAの第1類型（無強調の焦点化）は主に語順によって表されるが、判断の属性文においては表示されない(例えば、Modravé jsou hory.(青い、山が)が第一階層のTFAであると見なすことはできない)。

b) 三成分以上の文において深層における文頭の位置を占める動詞は、「前接辞化」あるいは「疑似の前接辞化」によって、いわゆる「Wackernagel 位置」に移動する。

Vstoupil Karel do pokoje.

(入った、カレルが、部屋に) →

→ Karel vstoupil do pokoje.

ただし、この規則から、次の類型に所属する、「三成分以上の文」は除かれる。

i) 通常の「物語」冒頭文

Byl jednou jeden král.

(あった、昔、ある、王様が)

Znáš tuto anekdotu ?

(知っている、この、ジョークを?)

Vejde Karel do pokoje a vidí: Na-jeho-židli sedí

(入る、君男が、部屋一に、そして、見る(と):彼の-椅子-に、座っている、

cizí muž.

見知らぬ、男が)

ii) 省略型の「物語」冒頭文

Jeden král měl tři dcery.

(ある、王様が、持っていた、三人の、娘達を)

日本語の観点から見た比較の結論

日本語の特徴

- 1) 助詞「は」は、情報価値が上昇する（省略可能性は下がる）位置において用いられる。
- 2) 助詞「が」は、情報価値が上昇しない（省略可能性は上がる、あるいは変化しない）位置において用いられる³。
- 3) 疑似分裂構文は幅広く用いられ、情報価値が急上昇することを示す。

チェコ語の特徴

- 1) 「主題・焦点の分節」は、広い範囲にわたって語順やイントネーションによって表され、情報価値の上昇を示すような語彙素あるいは形態素は存在しないと思われる。
- 2) 現実の世界に関する三成分以上の文では、述語詞は Wackernagel の位置に置かれる傾向が強く、語順による「主題・焦点」の区別は失われることがある。この現象の裏に、「現実」・「非現実」・「仮想の現実」の捉え方の違いがあると考えられる。
- 3) 疑似分裂構文は、言語システムの周辺においてのみ用いられる。
- 4) 無前提疑問文の場合、主観的語順の文型が用いられる。
- 5) 疑問代名詞を含む構文はほとんど義務的に、また不定代名詞を含む構文は任意的に主観的語順の文型における焦点と対応する位置に配置される。

共通点

- 1) 統語構造のプロトタイプのあり方を問わず、主題・移行・焦点の区別と、「客観的語順」（情報価値の上昇型）・「主観的語順」（情報価値の下降型）の区別は、両言語において一致している。
- 2) 「本主題」は名詞句によってのみ表され、主節においてのみ出現する。
- 3) 同じ発話において二つ以上の命題が融合し、情報構造が重複することがある。「重複の情報構造」に関与している成分は皆省略しがたく、さらに、主題と類似する属性を持ちながら、修飾節においても出現できる。
- 4) いわゆる「突然文」は、「主題・焦点」に関しては未分節である。この文の語順は、語用論的な条件とは無関係に、それぞれの言語における統語構造のプロトタイプに従う。

³1、2の点は、フィアラ(2000)の第IV部で示すように、通時的に安定した原理であると思われる。

文献⁴

- Chafe, W. (1987) "Cognitive Constraints on Information Flow" (ms, published in R. Tomlin (ed. 1987) *Coherence and Grounding in Discourse*, TSL 11. Amsterdam: Benjamin.
- Cowan, J. R. (1985) "Mechanisms of Anaphora". Paper presented at *the International Symposium on Anaphora*. Kieve (University of Nijmegen).
- Daneš, F. (1964) "A Three-level Approach to Syntax". *Travaux linguistiques de Prague 1*:225-240. Prague.
- Daneš, F. (ed. 1974) *Papers on Functional Sentence Perspective*. Praha: Academia.
- Erteschik, S. N. (1996) "The Dynamics of Focus Structure. F-structure, discourse theory and the stage/individual level distinction". In: B. Partee and J. Peregrin (eds.) *Discourse kinematics, topic-focus structure and logics*. Prague: Eighth European Summer School in Logic, Language and Information.
- Downing, P. & Noonan, M. (ed. 1995) *Word Order in Discourse*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Fiala, K. (1972) *A Bi-planic Approach to Japanese Semantics*. Monograph No. 5 of the series "Studia Orientalia Pragensia". Prague: Charles University.
- Fiala, K. (1980) *Koherence a linearita textu v japonštině*. (Doctoral Dissertation, mimeographed) Praha: filozofická fakulta Karlovy univerzity.
- Fiala, K. (1984) "Japanese - A Case for Non-configurational Approach?" *Proceedings of the 6th International Symposium "Japan Today"*. Berlin: Humboldt-Universität.
- Fiala, K. (1993) "Bemerkungen zur Wortordnung in der japanischen Sprache." *Proceedings of the Symposium "Traditional and Modern in Japanese Literature and Language"*, 140-152. K. Fiala (ed.), Praha: Charles University and Japan Center in Prague.
- Fiala, K. (1994) "Sentence and Discourse: An attempt at re-assessment of the background of utterances and sentences". *Proceedings of the 3rd International Symposium Linguistics and Phonetics 94*. Charles Univ. Press, Praha: B. Palek (ed.), 383-402.

⁴参考文献だけではなく、問題への紹介として必要な文献を含む。

- フィアラ、K. (1992a) 「文の接続の一モデル、試論」 林四郎編『応用言語学講座 4 知と情意の言語学』明治書院
- フィアラ、K. (1992b) 「文と文章との間」 林四郎編『文化言語学の建設 — その前提と提言 —』三省堂
- フィアラ、K. (1998) 「情報構造の働き」『平成 10 年国語学会春季大会要旨集』国語学会
- フィアラ、K. (2000、発表予定) 『日本語の情報構造と統語構造』ひつじ書房
- Firbas, J. (1992) *Functional Sentence Perspective in Oral and Written Communication*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Givón, T. (1995) *Functionalism and Grammar*. Amsterdam: Benjamins.
- Grosz, B. & Aravind, J. & Scott, V. (1995) “Centering: A Framework for Modeling the Local Coherence of Discourse”. *Computational Linguistics*, Vol.21, No.2.
- Hajičová, E. (1983) “Topic and Focus”. *Theoretical Linguistics* 10.
- Hajičová, E. (1993) *Issues of Sentence Structure and Discourse Patterns*. Prague: Charles University.
- Hajičová, E. & Partee, B.H. & Sgall, P. (eds.1998) *Topic-Focus Articulation, Tripartite Structures and Semantic Content*. Dordrecht/Boston/London: Kluwer Academic Publishers.
- Hajičová, E. & Hoskovec, & T.Sgall, P. (1995) “Discourse modelling based on hierarchy of salience”. *Prague Bulletin of Mathematical Linguistics* 64.
- Haider, H. & Prinzhorn, M. (1985) *Verb Second Phenomena in Germanic Languages*. Dordrecht: Foris Publ.
- Halliday, M.A.K. & Hasan, R. (1976) *Cohesion in English*. Burnt Mill, Harlow: Longman.
- 浜田敦 (1965) 「「が」と「は」の一面 — 朝鮮資料を手がかりに —」『国語国文』第 34 巻第 4・5 号
- 林四郎 (1998) 『文章論の基礎問題』三省堂
- Hinds, J., Maynard, S.K., Iwasaki, S. (eds.1987) *Perspectives on Topicalization: The Case of Japanese WA (Typological Studies in Language 14)*. John Benjamins Publishing Company.
- Iguchi, S. (1994) “Das Wackernagelsche Gesetz und Probleme der deutschen Worts

(Inokuchi)
正

- tellung-Vom Standpunkt der Rektions- und Bildungstheorie betrachtet”. 『中国
日本日耳曼語文学学者大会』北京
- 飯島周 (1989) 「V. Mathesius の機能的文構成における二三の基本的概念について」『跡見学園女子大学紀要』23号
- 金水敏 (1996) 「歴史的に見た「格助詞」の機能」Kinsui's Paper in *JCSS 96 Workshop*.
<http://www.soos.chukyo-u.ac.jp/jcss/CONFs/kinsui.html>
- Kiss, K.É. (ed. 1995) *Discourse Configurational Languages*. N.York, Oxford: Oxford U.P.
- Koktová, E. (1986) *Sentence Adverbials in a Functional Description*. John Benjamins, Amsterdam.
- Krujiff-Korbová, I. & Hajičová, E. (1997) “Topics and Centers. A Comparison of the Salience-based Approach and the Centering Theory”. *Prague Bulletin of Mathematical Linguistics* 67.
- Kuno, S. (1972) Functional Sentence Perspective. *Linguistic Inquiry* 3.
- Kuroda, S.-Y. (1972) “The Categorical and the Thetic Judgment”. *Foundations of Language* 9.
- Langacker, R. W. (1993) “Reference-point Constructions”. *Cognitive Linguistics* 4.
- Longacre, R. E. (1985) “Sentences as Combination of Clauses”. In: Shopen, Timothy (ed.) *Linguistic Typology and Syntactic Description*, Vol. II.
- Mathesius, V. (1929) “Funkční lingvistika”. *Sborník přednášek pronesených na Prvém sjezdu čs. profesorů filosofie, filologie a historie v Praze 3.-7. dubna 1929*. Praha.
- Mathesius, V. (1936) *Nebojte se angličtiny! Průvodce jazykovým světem*. Praha.
(日本語訳: 千野栄一・山本富啓『マテジウスの英語入門 — 対照言語学の方法』三省堂に収録)
- Mathesius, V. (1961) *Obsahový rozbor současné angličtiny na základě obecně lingvistickém*. Praha: Academia. (日本語訳: ヴィレーム・マテジウス『機能言語学』桐原書店、ヨゼフ・ヴァヘク編・飯島周訳)
- 宮地裕 (1986) 「主語・主題・提示語・総主語」『研究資料日本文法 8 構文篇』明治書院
- Mluvnice češtiny* I, II, III (1984). Praha: Academia
- 野田尚史 (1996) 『新日本語文法選書 1 「は」と「が」』くろしお出版

- Novák, P. (1974) "Remarks on Devices of Functional Sentence Perspective". In: Daneš (ed. 1974).
- 小川栄一 (1982) 「水が飲みたい」「水を飲みたい」式表現の用法差 — 室町期の状態 — 『日本語学と日本文学』(筑波大学国語国文学研究室) 2号
- 小川栄一 (1993) 「情報構造としての係り結び」『福井大学国語国文』32号
- 尾上圭介 (1973) 「文格と結文の枠」『言語研究』63号
- 尾上圭介 (1981) 「「は」の係助詞性と表現的機能」『国語学と国文学』58巻5号
- 尾上圭介 (1982) 「「ぼくはうなぎだ」の文はなぜなり立つのか」『国文学』27巻16号
- 尾上圭介 (1986) 「感嘆文と希求・命令文 — 喚体・述体概念の有効性 —」『松村明教授古稀記念国語研究論集』明治書院
- 大野晋 (1993) 『係り結びの研究』岩波書店
- Preinhaelterová, L. (1999) "The Role of Sentence Stress in Topic-Focus Articulation in Czech Compared to the Situation in English and Japanese". *Prague Bulletin of Mathematical Linguistics* 71.
- 佐伯哲夫 (1976) 『日本語の語順』笠間書院
- 佐伯哲夫 (1998) 『要説日本文の語順』くろしお出版
- 澤田治美 (1980) 「日本語「認識構造」の構文と意味」『言語研究』78号
- 澤田治美 (1993) 『言語と主観性』ひつじ書房
- Sgall, P. & Hajičová, E. & Buráňová, E. (1980) *Aktuální členění v češtině*. Praha: Academia.
- 砂川有里子 (1994a) 「コピュラ文と語順の原理」『国語学会平成6年度秋季大会要旨集』
- 砂川有里子 (1994b) 「コンテクスト文の形成 — 「はーだ」と「がーだ」をめぐる —」『第7回日本語教育連絡会議報告・発表論文集』
- 砂川有里子 (1995) 「日本語における分裂文の機能と語順の原理」仁田義雄編『複文の研究』くろしお出版
- Svoboda, A. (1968a) "The Hierarchy of Communicative Units and Fields as Illustrated by English Attributive Constructions". *Brno Studies in English* 7.
- Svoboda, A. (1968b) *Diatheme*. Brno: Brno U.P.
- 高見健一編 (1995) 『機能的構文論による日英語比較 — うけみ文、後置文の分析』くろしお出版
- 田窪行則 (1987) 「統語構造と文脈情報」『日本語学』6巻5号

- Tarjan,R. (1972) "Depth-first Search and Linear Graph Algorithms". *SIAM Journal of Computational Linguistics ANN.* 1972(146-160).
- 外池滋生(1989)「「は、も、が」の論理形式」『明治学院論集』446号
- Ungerer,F. & Schmid,H.J. (1996) *An Introduction to Cognitive Linguistics.* London and N.York: Longman.
- 山梨正明(1995)『認知文法論』ひつじ書房
- 吉田茂晃(1988)「「ノダ」形式の構造と表現効果」『国文論集』15号
- 渡辺美(1996)『日本語概説』岩波書店
- Zeuss,J.C. (1871) *Grammatica Celtica* 2. Berlin: Ebel.

(福井県立大学教授)

Summary

Topic Deployment and Topic-Focus Articulation in Japanese

— Contrasted with Czech —

Karel FIALA

This paper discusses “topic deployment” in discourse as a problem of two functional areas of human linguistic activity: a) the area of the description of states and events in a real or a possible world, proceeding as a simple archetype “scanning” of the supposed facts of the respective “world”, b) the area of judgment about the “world” referred to, which proceeds on the basis of a specific abstract system of “scanning”. Partial predictions of “topic deployment” may be obtained by the application of Centering Theory or Saliency Theory, or by an application of a path-searching strategy to a graphic model of the content of the discourse.

The results of the “scanning”, explained here by analogy with a T.V. scanning and a T.V. program editing system, are further segmented into utterances and other discourse units, in accordance with the cognitive cycle of focusing.

In the flow of conversation, utterance boundaries provide an opportunity for a switch-over between the individual conversational “turns”, for a change of the viewpoint, etc.

The paper further discusses aspects of the topic in Japanese sentences, contrasting them with their Czech versions on the basis of TFA theory.

In both languages the non-predicative part of the main clause may be segmented into the “focus zone”, which is obligatory, and the “topic zone” and the “transition zone”, which are optional.

In Japanese, the boundary between the Topic and the rest of the sentence

is marked by the particle -WA. In Czech, the beginning of the non-Topic part of the sentence is marked by the position of the verb. The similarity between both mechanisms is obscured in Czech sentences which consist of three or more components and refer to the real world. The Czech predicate is weakened by a “weak context dependency” and moves to the so-called “Wackernagel position”.

In both languages, topicalization in subordinate clauses is possible only by the application of semantic contrasting, or by the application of a semantic operator within the framework of the so-called “tri-partite structure”.